



## 第1回 NCDA ウェビナー、2020年4月24日、21:00～22:00（日本時間）

概要（※ただし、逐語的な記述ではなく、大意で訳していることをご了承ください）

### 【イントロダクション】

NCDA Journey ビデオ（0:00～3:20）

伊藤雅充の挨拶（3:20～7:45）

- ・現在は世界中が厳しい状況であるが、むしろこの困難を活かせるようにこの機会を使いたい。この機会に、世界中でのコーチデベロッパーやコーチング関係者でコミュニケーションを取りたい。

ジョン・ベールズ氏の挨拶（7:46～9:38）

- ・ICCE を代表して、NCDA と一緒にこうした取り組みができて嬉しい。
- ・スポーツの世界でも施設が封鎖されたり、大会が中止になったり、一緒に練習が出来なかったりなど厳しい状況である。しかし、だからこそコーチにもアスリートにも「創造性」が求められてもいる。
- ・今回のウェビナーはテクノロジーを活用して、コーチたちとつながり、健康を維持することを目的としている。

アンディ・ロジャース氏による導入（9:39～12:00）

- ・こうやって多くの方々が世界中から集っていることをよろこばしく思っている。こういう厳しい状況でコーチたちがつながって色々と話し合えることをとても嬉しい。
- ・今日は物語を共有することが大きなテーマとなっている。そこで、フィンランドのマイユとペッカに話を共有してもらおう。

### 【フィンランドの事例】

ペッカー・クレヴァー氏（ハーガ・ヘリア応用科学大学、NCDA 第5期生）の話（12:00～16:52）

- ・もうすでに多くの人たちが SNS を使ってコーチをサポートしているのを見ることが出来る。自分の話はコーチデベロッパーについての話を中心。現在、マイユ・コッコネン氏とさまざまな取り組みを行っている。

- ・1枚目のスライドは、フィンランドオリンピック委員会がコーチデベロッパーのためにやっている学びの共同体（community of practice）の例で、スポーツの各協会や大学で働いている人たちを思い起こさせてくれる。10年前に始まったときは考えをちょっと共有するくらいだったが、今は大きな家族のような共同体になった。
- ・私たち（ペッカやマイユ）が、オリンピック委員会に参加しているさまざまなスポーツ団体に所属するおよそ70人の教育マネージャーやデベロッパーに対して、この厳しい状況のなかでオンライン学習などを行うのをサポートしたり、またこの厳しい状況をどういう風に乗越えていくか話しあったりするのをファシリテートしている。
- ・そうしたなかでは、以下のアウトカムを設定した。

学びのアウトカム

参加者は、

- ・さまざまなオンライン学習のために多様な学習方法をデザインすることができるようになること。
- ・オンライン学習とミーティングのなかでさまざまなツールを活用できるようになること。

結果として、参加者は、

- ・オンラインで、社会的な交流を支援するさまざまな方法を考えて、それを習得した。
- ・どのようにしてコーチたちはオンラインでアスリートを支援することができるのかというアイデアをを考えて、共有した。

マイユ・コッコネン氏（フィンランド・ヴィエルマルキスポーツ機構、NCDA 第3期生）  
の話（16:52～24:37）

- ・プロセスのなかでは、実際にはさまざまなプラットフォームやツールを使っている（内容についてはスライドを参照）。
- ・簡単にビデオを送る方法などについての説明
- ・70人の参加者がいるなかで、その支援プロセスは未だに継続しているが、コーチデベロッパーたちは新しいツールを学ぶことができている。
- ・次のスライドはマイユ・コッコネン氏とペッカ・クレヴァー氏が実際にファシリテートをしている様子。現在も色々なことが継続している。

マイユ・コッコネン氏が実勢しているフロアボールのオンラインコーチングの例

- ・チームの中には、高い志を持っているプレーヤーたちもいる。
- ・自分のプレーヤーには動き続けてもらい、自分自身で練習の責任をもってもらいたいと思っている。コーチとしては機会と練習の内容についてアイデアを出している。
- ・チーム概要：11-12歳の14人のプレーヤー
- ・練習とその内容、週2回のズームによる練習（ただしもっと高いレベルの場合はもっとやってもよさそう）、ビンゴ・What's up challenge（What's app に写真を投稿する）・セッポ

ゲーム

[セッポゲーム(参照、<https://www.youtube.com/watch?v=n9ZPNaxbTMU> (YouTube))]

→問題点としては、子どもたちは自分たちで外で練習をやっているのですが、そのなかで子どもたちに何ができるのかを注意して考えなければならないこと。だから、練習には色々な制限がある。

- ・それ以外のツールとして、グーグルのサイト、X-break、カードゲーム、音楽、YouTube、TikTok などを使っている。

ペッカ・クレヴァー氏の付け足し (24:40~25:20)

- ・さまざまな競技 (アイスホッケーやサッカーなど) のコーチたちがお互いにサポートし合っていて、どんなことをしたらいいかを共有している。こんなことはこれまで生きてきたなかで経験したことはなかった。こういうのが見られるのはすごくよいこと。

### 【ニュージーランドの事例】

アンディ・ロジャースの話 (25:24~34:00)

- ・フィンランドがテクノロジーを使っているのはよいこと
- ・ニュージーランドのコーチデベロッパーシステムの話
  - 現在、300000 人のコーチがいて、そのうちの 95%が地域レベルのボランティアコーチたち。それに対して、600 人のコーチデベロッパーのワークフォースがあって、さらにそのコーチデベロッパーを支えるコーチデベロッパートレーナーが 60 人いる。今や、このトレーナーたちが不可欠な部分となっている。4 週間前にロックダウンになったときに、つながりと安全がとても重要だった。そこでまず 60 人のトレーナーに連絡をとって、どんな問題が起こっているのかを見極めて、さまざまな試みを行った。5つのグループに分かれて、毎週集まり、お互いに支援し合っている。
- ・結果として、学びの共同体 (community of practice) など新しいものが出てきた。協力し合うなかで、創造性が出てきて、コーチデベロッパーコースの実施の仕方などを再考するようになった。スポーツ協会・連盟のなかには、コーチ育成プログラムのやり方をもう一回考えてみるようになったところもある。
- ・オンラインサポートの例
  - コーチをつなぐプロジェクトが進行している
  - ニュージーランドコーチが協力して、支え合っている
  - ニュージーランドコーチデベロッパーがライブチャットを行っている
  - ネットボールニュージーランドが LEARNS フレームワークを作成

### 【その他の事例】 (34:00~42:24)

ジョン・グライドランド氏 (ノルウェー・オリンピック委員会、NCDA 第 5 期生) の話

- ・こうした状況で以前にも増して、コーチデベロッパーとしてコーチたちのことを配慮しなければならない

- ・この状況で、今はeスポーツが盛り上がっている。それをどうやってスポーツに向きかえるかを考える。
- ・スポーツは子どもにとって安全な場所だが、家庭のなかにはあまり安全ではないところもある。そういうところを気をつけないといけないし、コロナ収束後に備えないといけない。
- ・コーチ育成のやり方もオンラインなど今一度考え直さないといけない。

キャメロン・キオソグルース氏（アメリカ・ボート協会、NCDA 第5期生）の話

- ・アメリカボート協会ではここ一ヶ月で、先週の日曜日を除くほぼ毎日1回のウェビナーを開催している。ボート協会には8万人の会員がいるが、そのうち約7000人の会員がウェビナーに参加している。そのなかでは、コーチングの方法から現在の状況の対処の仕方についてまで、非常に多くのトピックが扱われている。
- ・どのようにさまざまなツールを使いこなせるかが大きな問題としてある。
- ・パラアスリートなども関わっており、組織の全体をつなぐチャンスになっている。
- ・こうした厳しい状況のなかで、「いかにしてつながるか」という基本的なことがいま試されている。いずれ対面して活動ができるようになったときに備える必要がある。

アンディ・ロジャース氏

- ・キャメロンが知っている「いかにしてつながるか」が重要なのはそのとおり。

### 【Q&A】(45:00~1:04:00)

スティーブン・ディロン氏（ニュージーランド、(NCDA 第3期生)）の質問

- ・財政モデルに何か変化は起きるのか。たくさん無料のオンラインコースがあった後で、それ以前のいわゆる伝統的なやり方に戻れるだろうか。
  - キャメロンの答え>今は会員に対して価値を与えている段階。正直にどういうふうになるのか、わからない。しかし、今はコーチを失う可能性などたくさん問題があるので、それを解決するほうが先決ではないか。
  - ジョン・ベールズ氏の応答>私たちとしては単なる知識以上のものを提供することで、価値を付加することができるのではないか。
  - アンディ・ロジャース氏の応答>今の状況だと「コーチデベロッパー」から「人々のデベロッパー」へのシフトが必要。

ジョン・グライドランド氏への「配慮」の意味についての質問

- ジョン・グライドランド氏の応答>自分の子供のクラブの話だが、コーチたちを誰も解雇しないようにし。コーチが子どものために色々なことをしているのを見てきたから、親として自分はそれに対して対価を支払いと思う。スポーツというにこだわるのではなくて、まずは子どもが大丈夫ということが大切。子どもについては、今楽しめることをやらせるのが重要ではないか。そして、子どもたちにはモチベーションが必要で、今の状況ではコーチの助けが必要だと感じる。

・ペレ・クヴァルスンド氏（ザンビア、NCDA 第3期生）より「インターネットがそれほど発達していない国ではどのような方法が考えられるか」という質問

→キャメロン氏の応答>本を使うことを提案する。いわゆる基本に立ち返ることが大切。家から出ることが出来ない人たちもいるなかで、どうやってその状況を受け入れるか。そして、いままでスポーツで触れてきた「楽しむこと」をこの状況の今の生活に取り入れるようにする。

→アンディの応答>自分たちも「ブッククラブ」を始めたよ。

#### アンディ・ロジャース氏の話

・ここでは答えられない質問があるけれど、何らかの形で答えられるようにしよう。

・「コーチデベロッパーが教えるというよりもファシリテートするようになるなかでどのようにしたらエビデンスに基づく研究をコーチ育成のなかで使えるようになるか」という質問。

→ベッカ・クレヴァー氏の応答>自分たちのやり方がコーチデベロッパーからコーチ、アスリートにまで届くのではないか（※ 本人も質問に少し困惑している様子）。

→ジョン・ベールズ氏の応答>ここ5年くらいでコーチデベロッパーの役割もかなり変化してきていて、NCDAの進化もそれに呼応するものだ。それは、いまだに発展している分野でもある。こうやってコーチデベロッパーが集う機会も、私たちが前に進む上では重要なことだろう。

→ジョン・グライドランド氏の応答>コーチデベロッパーとしてもまだまだ知らないものがあるのだから、それを未来に向けて活かすことが重要だろう。

・今は、コーチデベロッパーの実践についてさまざまな研究が出てきている。ニュージーランドでもダレンがそういう研究をやっているし、コーチデベロッパーシステムとそのなかで学びがコーチに対してどのような影響を与えているかといった研究などがある。他にも色々事例はあるだろうから、またの機会にでもそれを共有できたらいいだろう。